

(研究ノート)

近年の日本国内の蚕糸業の動向と製糸工場の現状

大 島 登 志 彦 ・ 原 田 喬

The Report of the Sericulture and the Silk-Industry with our recent
Observation in Japan now

Oshima Toshihiko · Harada Takashi

1. はじめに

わが国の蚕糸業は、戦前の経済発展を支えてきた重要な産業だった。とりわけ、本学が所在する群馬県は、明治5（1872）年に官営富岡製糸場が創業した後、多くの農家が参加する組合製糸が多数興隆するなど、特に盛んな地域の一つだった。そのため、群馬県の蚕糸業の歴史や概況を考察した論著は、本学の研究成果も含めて数多く発刊されてきた¹。蚕糸及び絹製品も含めた歴史を保存・伝承・公開すべく施設としても、「日本絹の里」が平成10（1998）年に開館（旧群馬町金古）し、同館や群馬県立歴史博物館では、蚕糸業に関わる大規模な企画展も、何度か行われてきた²。また、平成15年からは、群馬県が富岡製糸場を世界遺産に登録する運動を進めており、同24年には、高山社跡・荒船風穴・田島弥平旧宅を含めて「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、わが国を代表する世界遺産登録が推薦され、群馬県はそれに向けてさらに積極的な運動を展開している。また、関連する遺産として、新たに数十の「ぐんま 絹遺産」が指定されてきたほか、養蚕・製糸に関わる広報や新聞記事が増えたり、その見学や再生に関わる事業も数多く行われてきた³。

そのような先行研究や世界遺産登録に関わる広報活動が進む中で、筆者らはこれまで、甘楽富岡地域の製糸業に関連した輸送の変遷や、風穴や近年の製糸業に関わる研究や風穴の分布・概況やそ

-
- 1 山本三郎『製糸業近代化の研究』（昭和50年、群馬県文化事業振興会）。群馬県蚕糸業会編『群馬県蚕糸業史』上下、昭和30年。
小池重喜『製糸業の史的展開』『高崎の産業と経済の歴史』（昭和54年、高崎経済大学附属産業研究所編集集発行）pp.201~301。
高崎経済大学附属産業研究所編『近代群馬の蚕糸業 - 産業と生活からの照射-』（日本経済評論社、平成11年）。
 - 2 日本絹の里『製糸 - 近代化の礎（いしづえ）〜』（平成12年）。群馬県立歴史博物館『ふたつの製糸工場 - 富岡製糸場と碓氷社-』（平成9年）。
 - 3 平成24年末期以降で、富岡製糸場以外の構成3遺産の主体事業も含めて、筆者が把握した主要事業等を以下に記載（イコモスの現地調査等世界遺産登録に直接関わるイベントなどは含まない）。
 - ・富岡製糸場企画展：平成24年度「工女の暮らし展」、25年度「木骨煉瓦造建築の源流を探る」
 - ・富岡製糸場創業140周年記念 国際シンポジウム「世界遺産登録へ！ 産業遺産の魅力」（上毛新聞社などが主催、平成24年11月11日 群馬県庁）
 - ・「ぐんまシルクロードの旅」と称した富岡製糸場の関連施設を巡るモニターバスツアー（平成25年9月13~25日に計9回実施、富岡市と群馬県旅行業センターで企画）
 - ・高山社：シンポジウム「世界遺産が拓く藤岡の輝く未来」（上毛新聞社などが主催、平成24年11月11日 群馬県庁）
 - ・荒船風穴：1号風穴改修と下仁田町ふるさとセンターにおける資料展示（下仁田町教育委員会）
 - ・田島弥平旧宅：チラシの作成や10月に特別公開（平成24・25年、伊勢崎市教育委員会）



写真1 訪問した製糸工場で作られる生糸の商標

の意義などを考察してきたが⁴、養蚕製糸に関わる専門性や研究歴は乏しいし、製糸業界や行政的なつながりなど少ない。

筆者らは、養蚕・製糸の消長の記録と産業考古学の視点から、折に触れて現地調査を行ってきたが(写真1)、今般、近年まで、あるいは現在なお操業している製糸工場を数か所、工場見学と社長様等

から事業の現況や継続すべく経営努力などについての聞き取りなど、現地調査を行った(平成24年10月22日に碓氷製糸、25年6月14～15日に岡谷諏訪・山梨県内、11月1日に松岡株)。稼働している工場は、現在全国で1ケタの数になっているし、その工場でも、繭の入荷に苦勞し、稼働している設備も、工場全体の一部に留まっている状況を見聞してきた。本稿は、製糸に関して、世界遺産登録推薦や絹遺産の活性化等、華やかに広報される反面で、見聞を通して、在来工業としては先細りが加速化する近年のこうした厳しい状況の一端を、手元に入手できた資料も含めて、実態報告を含めて考察と記録していくことを目的とする。

2. 日本の製糸業の歴史大要

わが国の生糸生産量は、戦前の昭和5～15年をピークとして、年産4,000万kgを越えていた。戦中戦後に500万kg余に落ち込み、戦後は、製糸工場は、精密機械工場などに転換したのも多かったが、20～30年代には、高度経済成長の波に乗ってかなり復興成長し、昭和33年から50年ころにかけては、年産2,000万kgを維持していた(表1)。すなわち、昭和40年代は戦後の活況期だったが、昭和44(1969)年には、器械製糸工場が、北海道と青森・秋田県を除いた全国広域的(富山・石川・和歌山県などには所在していない)に計167も所在し、免許台(釜)数は17,000機近くに及んでいた(自動・多糸・普通機を含む)。国用器械製糸工場も、計815を数え、免許台数8,019機に及んでいた。とりわけ、多数の工場が立地していたのは、福島県13・14、群馬県16・98、山梨県13・82、長野県26・236だった(器械製糸13以上を基本に釜数の多い県を拾い、器械製糸工場数・国用器械製糸工場数で記載)⁵⁶⁷。

4 大島登志彦「上信電気鉄道の創立からバス事業確立までの過程」『群馬・路線バスの歴史と諸問題の研究』(平成21年、上毛新聞社)。

原田喬「養蚕製糸を支えた風穴」『群馬・産業遺産の諸相』(高崎経済大学附属産業研究所編・日本経済評論社、平成21年)。

5 農林省蚕糸園芸局編「器械製糸工場名簿」(昭和44年7月31日現在、日本蚕糸協会)

6 農林省蚕糸園芸局蚕糸課「国用器械製糸工場名簿」(昭和44年7月31日現在)

7 定義は定かではないが、器械製糸工場とは、国産の繭を大型の自動繰糸機で良質の輸出用を含む生糸を生産する工場を指すと考える。また、国用製糸とは、安価な輸入繭も含めて生産し、多少質が落ちるので、主に国内向けの生糸を生産する方式を指すと考える(器械の有無ではない)。上記注6の文献題目の国用器械製糸工場とは、器械設備は有するが輸入繭も含めて使用している工場を指すと考える。国用製糸には、器械設備のない小規模な座繰の方式の工場が多かった。

しかし、昭和50年以降、稼働工場は急速に減少し、平成10年には年産1,000万kgを割り込むが、その後も激減して、今や国内での生糸生産自体の継続が危ぶまれる状況と考える。集繭量についても、同様の傾向にある。養蚕農家については、戦前は全国で200万戸以上所在しており、戦中戦後の養蚕農家の効率化の中で、30年頃の80万戸を契機に減少し続け、50年には約25万戸になっていた。その後は激減していき、平成16年には1,850戸となっている。このころ、

表1. 日本の生糸生産量及び養蚕の推移

| | 生糸生産量 (万kg) | 取繭量 (十トン) | 養蚕農家戸数 (百軒) |
|-------------|----------------|--------------|----------------|
| 大正 4 (1915) | 1,517 | 17,426 | 16,735 |
| 9 (1920) | 2,188 | 23,747 | 18,948 |
| 14 (1925) | 3,107 | 31,792 | 19,487 |
| 昭和 5 (1930) | 4,262 | 39,909 | 22,160 |
| 10 (1935) | 4,373 | 30,743 | 18,946 |
| 15 (1940) | 4,277 | 32,780 | 16,450 |
| 20 (1945) | 522 | 8,464 | 10,043 |
| 25 (1950) | 1,062 | 8,142 | 8,346 |
| 30 (1955) | 1,737 | 11,437 | 8,085 |
| 35 (1960) | 1,805 | 11,121 | 6,457 |
| 40 (1965) | 1,911 | 10,551 | 5,137 |
| 45 (1970) | 2,052 | 11,174 | 3,991 |
| 50 (1975) | 2,017 | 9,122 | 2,484 |
| 55 (1980) | 1,615 | 7,306 | 1,656 |
| 60 (1985) | ※1,078 | 4,727 | 997 |
| 平成 2 (1990) | ... | 2,493 | 521 |
| 7 (1995) | ... | 535 | 136 |
| 12 (2000) | 49 | 124 | 32 |
| 16 (2004) | 23 | 67 | 19 |

※昭和59年の数値

まだ国用製糸は、全国に数十か所所在していたとされるが、器械製糸は碓氷製糸農業協同組合（群馬県、以下碓氷製糸）、須藤製糸（株）（茨城県）、藤村製糸（株）（高知県）、松岡（株）（山形県）の4社になったと言われていた。養蚕農家の減少が一層顕著になって、国産繭の入手が困難になったのを理由に、閉業した工場もあったという。

資料：農林水産省の統計（インターネットホームページ）より作成

こうしたなかで平成17年3月、生糸生産者団体だった日本製糸経営協議会（6社）は会員2社が休廃業して解散し、それに代わって同年4月、全国製糸連絡協議会が設立した。その趣旨には、次のように記されており、器械製糸と国用製糸を区別することなく製糸業の健全な生き残りをかけて当組織が結成されたと考える。

・・・（前略）・・・現に複数の製糸業者が稼働しているにもかかわらず、製糸業者の相互間の連絡を密にして意志結集する組織がなくなり、このことは、蚕糸絹業の要である製糸業の健全な維持発展や、我が国のきものに代表される和装文化などにも大きな影響を与えるのではと危惧されていました。こうしたことから、製糸業者各社は今後とも関係機関、関係団体との連絡の円滑化を図り、・・・中略・・・織物業者などのニーズを意識した製糸の供給体制を構築することが重要であるとの見地から従来の国用・玉糸を含めた幅広い製糸業者有志の参加を募り「全国製糸連絡協議会」を結成・・・後略・・・

その本部は、蚕糸会館（千代田区有楽町）5階に所在し、松岡（株）、碓氷製糸、松沢製糸所、宮坂製糸所、西予市野村シルク博物館、吉岡製糸場、(有)三珠館村松製糸所、大下製糸場の8社が参加していた⁸。しかし、在来型蚕糸業はその後もさらに先細っていき、上記の須藤製糸と藤村製糸の2社は、

8 全国製糸連絡協議会事務局 鈴木浩「全国製糸連絡協議会の設立」2005年6月号国内（シルク情報ホームページ、<http://sugar.lin.go.jp/silk/info/topics/0506tp1.htm>）、平成19年9月23日現在。

表2. 近年の日本の蚕糸絹業の推移

| | 製糸業 | | 養蚕業 | | 絹織物生産量 (十萬㎡) |
|-------------|-----------|--------|----------|------------|-----------------|
| | 生糸生産量(百俵) | ※製糸工場数 | 取繭量(十トン) | 養蚕農家戸数(十軒) | |
| 昭和50 (1975) | 3,399 | 123 | 9,122 | 24,840 | 1,565 |
| 60 (1985) | 1,586 | 67 | 4,727 | 9,971 | 1,075 |
| 平成 7 (1995) | 534 | 29 | 535 | 1,364 | 541 |
| 11 (1999) | 108 | 8 | 149 | 328 | 334 |
| 15 (2003) | 48 | 14 | 78 | 207 | 239 |
| 16 (2004) | 44 | 13 | 68 | 185 | 219 |
| 17 (2005) | 25 | 10 | 63 | 159 | 198 |
| 18 (2006) | 20 | 9 | 51 | 135 | 185 |
| 19 (2007) | 18 | 8 | 43 | 117 | 155 |
| 20 (2008) | 16 | 7 | 38 | 102 | 140 |
| 21 (2009) | 12 | 7 | 33 | 92 | 115 |
| 22 (2010) | 9 | 7 | 27 | 76 | 116 |
| 23 (2011) | 7 | 7 | 22 | 63 | 104 |
| 24 (2012) | 5 | 7 | 20 | 57 | 100 |

※製糸工場数は平成11年まで器械製糸工場のみ

平成11年以降はすべての製糸工場を含む

資料:「シルクレポート」(大日本蚕糸会発行)2008年7月号・2013年11月号をもとに筆者作成

その前に閉業したと思われるし、現在は、6章で考察するように、山梨県内の3社も閉業している。現存する製糸工場は、統計上7社とされているが(表2)、筆者らは、未調査の西予市野村シルク博物館を含めて5社を認識している。

3. 群馬県の近年の変容と碓氷製糸

(1) 群馬県の製糸業の概要

群馬県は、前記のように長野県に次ぐ蚕糸業の盛んな県で、商品市場では、「前橋乾繭」が重要な取引商品となっていたこと(平成10年に横浜生糸に統合)も、思い出される。また、昭和50年代には、県内各地で、大規模器械製糸工場を初め、個人の家内工業的な改良座繰製糸工場も稼働していたが、富岡製糸場が昭和62(1987)年に操業停止したことに代表される如く、昭和末期から平成にかけて、相次いで閉業した。稚蚕飼育所が相次いで閉鎖されたことも、集繭量の激減に影響するが、昭和56年には30か所が閉鎖されたという⁹。

平成12年以降まで日産自動車の繰糸機を使用して器械製糸で存続した吉野組製糸所(昭和21年創業、渋川市)は、「ぐんま200」「世紀21」などの群馬県産繭でブランド化をはかって生き残りかけたが、平成14年限りで閉業した¹⁰。また、上記した器械製糸4社のなかで、須藤製糸は伊勢崎市に、藤村製糸は群馬町に事務所(取繭等の業務と思われる)を有していたので、4社中3社が群馬県内に所在したことになる。2社の事務所の看板を、筆者らは確認しているが、閉業の前後に看板はなくなり、「上毛かるた」に詠まれている「繭と生糸は日本一」は、それを学ぶ小学生も、身近に接することができなくなった状況と言えよう。

9 「稚蚕飼育所閉鎖相次ぐ」昭和56年11月7日上毛新聞。

10 「県産繭でブランド化 吉野組製糸所」平成10年10月23日上毛新聞。
「ぐんまのきいと」(群馬県農政部蚕糸課、平成12年)。

（2）碓氷製糸農業協同組合（安中市松井田町
新堀）（平成24年10月22日調査）

平成25年現在、県内で稼働している製糸工場は、碓氷製糸農業協同組合1社となっている。同工場は、元々は会社組織だったが、それが廃業して、松井田町内の農家が中心に出資して、昭和34年に創立した組合製糸工場である。組合製糸は、かつて全国に多数所在し、製糸工場の主要形態の一つで、群馬県西部では、甘楽社・碓氷社・下仁田社などが著名だった。



写真2 妙義山をバックに碓氷川沿いののどかな里山に立地する碓氷製糸の工場

工場には日産自動車製自動繰糸機が並ぶが、閉業した吉野組製糸所（上記）と同様に、群馬県産のブランド繭8品種を含む十数種類の繭から、碓氷の太糸、座繰り生糸など6種類の方法で、付加価値の高いブランド生糸の生産に取り組み、全国に販売している。蜂の巣倉庫¹¹も2棟あるので、繭の入荷には力を入れていたことが伺える。会社の外観も、建物面積が延9,756㎡というが、妙義山をバックに、手前からかつての女子寮や工場、荷受所と2棟の倉庫等が効率的に配置され、昔の製糸工場の面影をとどめている（写真2）。従業員は33名、繭の出荷者は480戸（群馬県314戸・県外166戸）で、年間で収納繭165,000kgから36,000kgの生糸を、通年生産している。また、組合員は377人、出資金は4,191万円である（設備や人数等は平成23年4月現在）¹²。

富岡製糸場に近いこともあって、近年脚光を浴びて見学者が増えているが、絹織物や靴下や下着、スカーフなどの日用する絹製品を独自に開発して、併設した売店で展示・販売している。

4. 松岡株（山形県酒田市・旧松山町）（平成25年11月1日調査）

碓氷製糸と並ぶ国内で現役唯二の器械製糸工場のある松岡株の歴史は、明治5年、現在の鶴岡市の郊外に広がる松ヶ岡の開墾事業に始まる。松ヶ岡開墾場は、庄内藩士約3,000名で、月山の原生林を開墾し、7年までに311haの桑園を造成した¹³。また、同年には、群馬県の鳥村に17名を派遣して養蚕技術を実習するが、帰郷するとただちに蚕室の建設について協議して、翌明治8～10年に木造3階建ての蚕室計10棟を建設して、大養蚕場となった。第二次世界大戦後、養蚕が斜陽化する中であって、今日まで明治初期の蚕室10棟中5棟が現存し、平成元年に国指定史跡となる。松ヶ岡開墾記念館、庄内映画村資料館などに活用され、鶴岡市内の重要な観光スポットにもなっている。

同社¹⁴は、松ヶ岡に明治20（1887）年、大蚕室と一体となった製糸工場として建設・創業したこ

11 必要量の繭を簡単・効率的に取り出して繰糸場に運び出せるように、筒状の貯蔵庫を蜂の巣状に組み（3尺四方で20～60個位が多い）、搬入された乾繭を上部（4階が多い）から投入して保管しておき（3階・2階部分）、1階で取り出す方式の繭倉庫の総称。

12 碓氷製糸農業協同組合の工場案内及び概要を参照。

13 松ヶ岡開墾記念館にて入手（平成23年9月）資料を参照。

14 松岡株式会社の会社案内を参照。同社の社名は、創立当初松岡製糸所で昭和17年に株式会社組織に改変→昭和45年に松岡協同製糸株→同62年に松岡株となる。



写真3 松岡(株)の本社工場の全景

とに始まるので、全国的にも由緒ある蚕糸企業である。大正2(1913)年に松嶺分工場が設置され、昭和12(1937)年にはそちらが本工場(現存地)となり、戦後は、同33年にいち早く日産自動車製自動繰糸機を導入した(写真3)。この間、村山市の製糸会社などを合併して規模を拡大したが、40年代以降製糸の斜陽化で、婦人服部門を新設、昭和末期は、電器・電子部門やシステム開発部門を新設して、製糸業の縮小に対応してきた。



写真4 日産自動車製自動繰糸機が稼働する松岡(株)の工場

製糸工場では、昭和47年日産自動車製の自動繰糸機が、煮沸繭から糸を巻き上げ、工員が左右に動いて切れた糸を括る作業を休みなく行い、製糸の全盛時代を思わせた(写真4)。類似の器械は3列並んでいた。訪問当日稼働していたのは、1列だけだったが、品種毎の糸の太さが設定されており、注文のあった品種に応じて稼働器械が使い分けられるようだ。主力のブランドは、「ファインシルク」と「松岡姫」だが、他に、ナイロン等との複合糸も数多く創出しているという。

荷受場には、倉庫に入る前のはち切れそうな白い繭袋が多数見られたが、訪問日の前日に栃木から平成25年最後の繭が入荷したという。繭袋は、閉業した各所のものも入り混じり、富岡製糸場と書かれた袋もあった。隣接して4階建て蜂の巣倉庫が立地しており、そちらに在庫している繭は少なかったが、計62穴あり、今でも使っているという(写真5)。



写真5 松岡(株)の蜂の巣倉庫(左が倉庫下段階の仕切られた天井、右が筒穴の上段階から投入された繭)

本社工場の従業員は200人余りだが、シルク事業部所属は、うち10名前後だという。また、養蚕農家の激減に伴って繭の入荷が減り、夏場の7～9月には休止するなど、生産量は減少している。同社・工場のメイン事業として力を入れて上向きなシステム開発部では、最新鋭の航空機部品も製造しており、「SILKから航空機へ」と書かれた社内のパネル展示が印象的だった。現在、製糸業は、シェアはわずかで採算性の悪い部門になっているが、明治初期の庄内藩士らの労苦によって築かれた蚕糸の歴史を後世に伝承すべく使命を担って、製糸業は継続していくという。

5. 岡谷・諏訪地域の製糸工場（平成25年6月14日調査）

諏訪湖を取り囲むこの地域は、戦前は全国でも有数の製糸工業地帯であり、戦後精密機械工場などに移行した工場も多いが、昭和末期まで、十数か所の製糸工場が稼働していた。平成に入る前後に相次いで閉業したと思われるが、平成25年現在、(株)宮坂製糸所と松沢製糸所の2社で製糸業が継続されている。また、近年まで、木造4階建て土蔵造りの下諏訪倉庫（第3号倉庫）が、製糸全盛を物語る遺構として残っていた。しかし、平成17年頃に取り壊されてしまった。

(1) (株)宮坂製糸所（岡谷市東銀座）

近代製糸業発祥の地岡谷にその歴史を残す唯一の製糸工場といえる。中国から西回りでヨーロッパを経由した諏訪式座繰機、中国から東回りに伝わり日本で発達した上州式座繰機が、それぞれの作業場でベテラン工女さんから若い人たちへ伝えられている（写真6）。別棟では自動繰糸機（恵南式）が活躍し、揚げ返し工場を経て洗練された生糸を国内に供給している。これら3系統の技術で、和風の着物や輸出ものの生地に適した生糸を生産しているのが特徴であり、調査日には、上州式座繰機のラインが稼働していた。学校教育にも市民学習の場にも提供されるほか、内外のメディアにもたびたび紹介されるためか、見学時に取材陣と遭遇することも多い。

岡谷の製糸業の発展の歴史の保存と資料収集・展示が行われてきた岡谷蚕糸博物館は、同市の活性化を図る上で重要な位置づけとしての認識が行政や一般市民にも高まったためか、現在改修中である。完成に際して、スペースも相当拡大され、宮坂製糸所は、その館内に移転して操業を継続していく予定だという。後継者も経営の主導的立場になり、未来志向を感じつつ、岡谷市の観光や産業文化の活性化と蚕糸業の将来の可能性を期待したい。

(2) 松沢製糸所（諏訪郡下諏訪町）

大正時代に曾祖父の代に創業し、ビス糸を信濃絹糸に納めたという。以前から、山梨・埼玉県初め、遠く高知・愛媛県などからも繭の入荷があったという。そのためか、現在でも国内繭の入荷がそれなりに確保でき、近年最新鋭の煮



写真6 上州式座繰方式の製糸工程（宮坂製糸所）



写真7 松沢製糸所の外観（燃料費節約のためボイラーには手前に積まれた廃材木が使用される）

繭機（ハラダ社製のHSB型進行式）を導入するなど、工場には活気に満ちていた。現在、日産自動車製の自動繰糸機10釜が稼働し、注文に応じて、63中（デニール）、42中、31中、27中、21中の5種類の太さの生糸を生産している。製品・生糸の納入先は、宮津市、富士吉田市、長浜市などの織物業者の他、石川県の加賀友禅や白山の牛首紬の織物業者などだという。

現在、繭の入荷が途切れる11月～5月は休止することもあるというが、社員は7名でフル稼働している。社長の松澤清典様は元気で、21歳の息子も、工場内で後継者として働いていることも強みと考える。工場の前には、廃材木が山と積み込まれているが、それらの雑燃料をボイラーに利用している（写真7）。

6. 山梨県内の近年まで稼働していた製糸工場（平成25年6月15日調査）

2章で記した通り、山梨県は、長野や群馬と並ぶ蚕糸の主導県の一だった。製糸工場は、平成17年時点でも、3社が稼働していたと思われるが、現在全て閉業してしまった。県中央部に位置して市名にも繋がったと思える現中央市（平成18年に豊富村と玉穂・田富町が合体して成立）が、蚕糸の中心だったといわれるが、旧豊富村には、シルクの里公園や「シルクふれんどりい」と称する日帰り温泉が整備され、それらに併設した豊富郷土資料館には、養蚕製糸の現場を再現したユニークな展示もみられ、製糸業が盛んだった時代を物語っていた。

山梨県内の事情について、筆者等は、数年来、複数回調査してきたが、今回再調査を行った。その際、新たに三珠館や上記の豊富郷土資料館を訪問したところ、器械製糸工場跡がまだ1か所残っているという話を聞いた。以下、当日の調査を主体に、山梨県に最終段階まで稼働していた器械製糸工場の事情を考察する。

（1）器械製糸工場跡（南アルプス市）

中央市の釜無川西岸に隣接する南アルプス市に13～14年前まで稼働していたという当所を訪ねると、まず、外観の丸テラス付の女子寮跡が目を引き、モダンな女子寮を作って従業員を育てた意気込みが感じられた。工場稼働時の社長様が、工場を丁寧に案内して下さったが、入寮者は、全体としては80%が高卒、中卒者は20%程度で、秋田出身者は45%が中卒だったという。

この近くにはゲンゼの工場があり、社長様の祖父が、繭の買入に活躍し、出荷は主に丹後地方が多かったようだ。工場は約2,000坪の面積だったといい、工場跡の建物にも多少の固定資産税がかかるものの、解体して更地にしても、雑草が繁茂して手入れに費用がかかるので、工場はそのままにしてきたという。工場内にそのまま残されていた繰糸機は、1974年6月製造のNISSAN - HR型

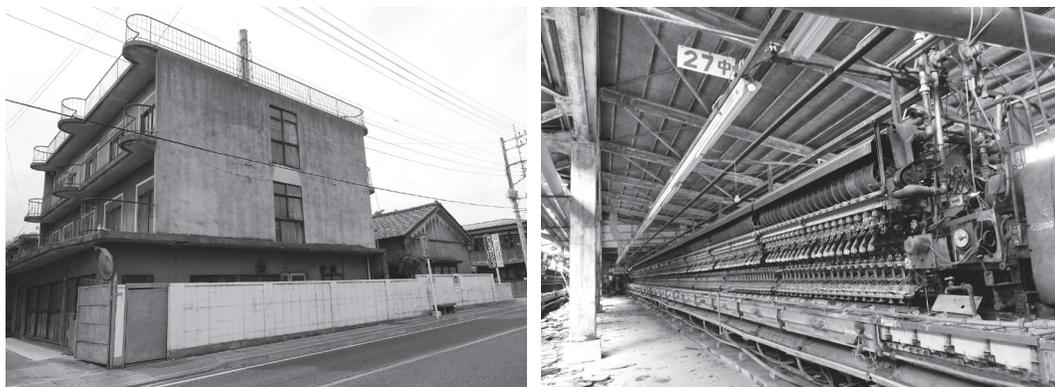


写真8 山梨県内の器械製糸工場跡（左はモダンな女子寮が残る外観、右は日産自動車製繰糸機が並ぶ工場跡の内部〔手前の「27中」と記された吊り札は、設定された糸の太さを示す〕）

であり、24釜が3列計72釜が並ぶ壮大な設備で、一部が倒壊していたものの、全盛時の器械製糸工場跡を髣髴させるもので、四半世紀以上タイムスリップした感触のひと時を過ごせた（写真8）。

4階建ての蜂の巣倉庫が残り、46個の出繭口があった。また、10段の大型乾燥機が、往時の繁栄を示すように残っていた。煙突は、ステンレス製で5尺×10尺を積み上げ、土台はコンクリート製である。ボイラーは、横置式が2基あり前田鉄工所昭和30年製であった。ほとんど1基で間に合ったが、予備に丸善製ボイラーも設置しており、雑燃式もあった。この工場は、昭和44年には資本金1,600万円、自動機50機を有しており、当時個人名の製糸工場としては、国内でもトップクラスの規模だったことが確認できる¹⁵。

（2）有）三珠館村松製糸所（旧三珠町、現市川三郷町）

昭和44年には、旧釜41釜、新釜31釜、合計72釜¹⁶を所有しており、その台数は山梨県では2番目の台数を誇る国用器械製糸工場だった。当時は普通機、多条機、自動機（恵南式、プリンス式）などが入り交じっていたようだ。10年ほど前に社長が死亡したので、工場も閉業したという。

自宅の前の街灯には「三珠館村松製糸所」の看板が、かつての工場の所在を物語っている。JR身延線芦川駅近くの旧三珠町の中心部で、旧上九一色村（古関地区）への分岐交差点に位置していた。工場跡は畑になっていたが、自宅の一角には、繭倉庫、生糸倉庫だったと思われる上げ下げ器があり、当時の道具類も残されていた。

（3）大下製糸場（山梨市上神内川）

昭和44年において、旧釜56・新釜15計71釜を有していたので、上記の三珠館と同等の規模を誇る活気のある工場だった¹⁶。全釜が恵南式自動繰糸機で、数年前に訪問したとき、機械類は休止していたが、注文があれば操業する旨を御主人が語っていたことを思い出す。服飾関係には多くの顧客を抱えていたようで、洋装品が数多く残されていた。後継者がいないことや、三珠館が閉業したこ

15 農林省蚕糸園芸局編「器械製糸工場名簿」（昭和44年7月31日現在、日本蚕糸協会）〔前掲5〕

16 農林省蚕糸園芸局蚕糸課「国用器械製糸工場名簿」（昭和44年7月31日現在）〔前掲6〕

とを、寂しそうに語っていた。今回再度訪ねた際、すでに閉業し、自宅は少し奥に移られたようで、工場跡は別の方の住居となっており、工場の面影はなかった。

(4) 吉岡製糸場（笛吹市熊野堂）

平成23年まで稼働していたので、山梨県で最後まで存続した製糸工場である。吉岡氏夫妻は、そのことに誇りを感じながらも、操業を継続する厳しさを語ってくれた。

昭和44年において、国用器械製糸工場で、旧釜11・新釜4（すべて恵南式）を有していた¹⁷。小規模な工場だが、昭和30年代の最盛期には、従業員も10人以上いて、工場には活気があったという。後世には、碓氷製糸からくず繭（よごれや変形などのため選別作業で排除された繭）を分けてもらい、普通では糸にならない部分を工夫に工夫を重ね、節のある糸にしていたという。新潟県の小千谷市や長岡市栃尾の機屋、問屋から引き合いが多くあったが、生糸の販売先は、次第に少なくなっていくのが残念だったようだ。また、外国から安価な繭が輸入されて、日本の養蚕製糸業界の経営が悪化する中で、国の補助金が、養蚕家、製糸業者、織物業者のチームに支給されるようになったが、その額は少なく採算ベースに程遠く、後継者もいないので、閉業せざるを得なかったという。

前回訪問した時には、自宅の裏庭に工場の建物が残っていた。今回の調査では、跡地に植えられた庭木の柱に器械の一部が再利用されていたが、工場跡は、解体されて分からなくなっていた。

7. おわりに

本稿は、断片的ではあるが、筆者らのこれまでの見聞調査と蓄積してきた資料をもとにし、さらに平成25年に現存する製糸工場を中心に見学調査を行って、執筆したものである。工場ごとに調査事項は不統一であり、収集資料の整理の不備や認識不足な部分も多いが、先細りつつある蚕糸の現業の考察と記録も踏まえて、概要報告としてまとめたものである。なお、本稿の写真1～8は、文中に記した調査日に大島が撮影したものであり、写真1に写し込まれている商標は、大島が所有しているものを使用している。

（おおしま としひこ・本学経済学部教授／はらだ たかし・下仁田町文化財調査委員）

（付記）

本稿に記した各工場などにおける見学調査にあたりましては、関係者には、格別の御配慮と御協力いただきました。また、養蚕製糸に関わる情報提供や各工場の見学に際して、（財）大日本蚕糸会会頭を務める本学の高木賢理事長には、多くの情報の提供と御便宜をはかっていただきました。これらを付記して、各方々に感謝申し上げます。本号は、山本喜則教授退職記念号である。筆者の大島は、高崎経済大学に勤務してきた十数年間、同教授に各方面からお世話になってきたことに対して、祝福と御礼申し上げます。

17 農林省蚕糸園芸局蚕糸課「国用器械製糸工場名簿」（昭和44年7月31日現在）〔前掲6〕